
たぶん乙女ゲームの脇役的ポジション

花二琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たぶん乙女ゲームの脇役的ポジション

【Nコード】

N0075BA

【作者名】

花二琴

【あらすじ】

最近転入してきたレイカ、そしてその友達の咲。恋愛相談という名の、よく分からない質問に咲は疑問を抱きつつも答え、そして物語は進んでいく。乙女ゲームの脇役兼お助けキャラ(?)的な主人公と、乙女ゲームの主人公的な女の子の、学園恋愛物語のようなものです。習作なので見苦しい点が多々あるかと思えます。 亀更

新

蘇芳 咲

ゆらゆらと夢と現実の間を意識がうろついている感覚が昔からなんとなく好きだ。

じきに覚醒する合図のようなそれは、寝入る寸前の幸福に似ている。

目覚まし代わりに携帯電話のアラームを、鳴り出した瞬間に止めた。

数秒間だけの明るい音色は今使用している携帯電話に最初から入っていたもので、まだ最後まで聞いたことがない。

隣の部屋で寝ている兄に気を使って小さく抑えられた音量は、あまり目覚ましとしての役割を果たしていなかった。

毎朝この時間に起きるためか、すっかり体内時計が動いて機械の力を借りずとも自然と目が覚める。アラームは一応の保険だ。

朝六時半過ぎ。今は春から徐々に夏へと近づいていく中途半端な季節で、徐々に太陽が顔を出すのも早くなってきている。

枕の上で数回瞬きを繰り返すと、咲は布団ごとゆっくり起き上がった。

ふかふかした羽毛布団の下で、小さく伸びをする。だんだんこの布団も暑くなってきた気がする。週末になったら薄いものに変えてもらおう。

ぼんやりと思考をめぐらせながら、斜めになっている枕を整えてベッドから降りる。

ベッドの上で乱れた布団を、空気をふくませるようにして勢い良く持ち上げると、敷布団を覆うようにしてかぶせた。

すぐに寝る前のふんわりとした状態になったのに満足して、着替えるためにクローゼットへ向かう。カーテンはまだ開けない。

クローゼットを開けると、それなりの数の洋服がハンガーに掛けられている。

クリーニングから戻ってビニールが被ったままのコートや春用の服を端に押し込めるように寄せ、皺一つ無いブラウスと制服のスカートを取り出す。

横着してベッドの上にそれらを放り投げると、重みで布団がわずかに潰れてしまった。

あ、と一瞬思うが、まあいいかと視界から外した。

パジャマのボタンを外して脱ぎ、クローゼットの側にあるドレッサーの椅子にかけておく。

白と桃色の上品なドレッサーは、高校入学の記念に咲の母が買ったものだ。

本格的に化粧をするわけではないが、多少は楽しみたい。そんな気持ちを汲んだのか、父も苦笑しながら一緒に選んでいた。

クローゼット備え付けの箆笥の一段目をあける。中に入っているブラジャーとキャミソールを取り出して着けた。三点セット揃いで買った下着は、レースの模様が可愛くて気に入っている。

引き出しの隅にたたんで積んである黒色の学校指定のハイソックスを出し、再びベッドへと移動した。

ブラウスに袖を通してボタンを留めていく。一番上は留めない。ズボンを下ろしてスカートに履き替える。結構可愛いと評判の、赤のチェックが入ったスカートは規定の長さのまま。

少し身長が伸びて丁度良くなったのか、入学当時のやぼったい印象も抜けている。

けれども下着が見えそうならい丈の短いスカートをはいている女子生徒にしてみれば、それでもダサく見えるのかも知れない。

スカートのポケットに入れっぱなしだったりボンを締めて、少しだけ緩める。ほどよい形に整えて、ぽんと上から叩いた。

最後にソックスをはいて着替えは終了。

「樹ー！ 今日一限目からじゃないの？ そろそろ起きなさい！」
兄を呼ぶ母の声が一階から二階へと響き渡る。最近は夜中までレポートの仕上げで寝不足なせい、樹は寝坊することが多くなった。

といつても大学三年目となると必修の授業も少なく、あまり気にしていないようだ。

今日は二限からだつつのと樹の寝ぼけ混じりの返答が暫くして階下へ投げられるのを耳にしながら、寝癖で跳ねてしまった髪をブラシですいた。

アイロンで毛先をほんの少し内巻きにすると、ヘアスプレーをさつとかけておく。

カーテンを開けて天気を確認。太陽はまだ顔を出し始めたばかりだが、今日は一日晴れっぽいと、あまり根拠もなく思う。

脱いだパジャマと、鞆、薄手のカーディガンを手に取ると、咲はやつと自分の部屋から出て行った。

「おはよう」

「今日も早起きね、おはよう」

「おう、おはよう、咲」

リビングのドアをあけて中に入ると、パンの焼けるいいにおいがした。

炊飯器から弁当箱にご飯を摘めていた母が振り返り微笑む。

食卓には既に父が着いていて、傍らにある新聞を眺めながらコーヒーを啜っている。テレビでは朝の天気予報が流れていた。

鞆を足元に置いて椅子に座り、中央に置かれた皿に積み上げられているクロワッサンを二つ小皿に取り分ける。まだ温かい。

「咲、今日お父さんとお母さんね、ちょっと帰ってくるのが遅くなりそうなのよ」

端にバターを塗っていると、ココアが目の前に置かれた。このココアは普通のものより苦め。コーヒーが飲めない咲の、朝の眠気覚まし。

「仕事忙しいの？」

クロワッサンを齧りながら側に立つ母を見上げる。母は困り顔で頬に手を当てていた。

「まあまあね。今日の晩御飯だけど、お金置いておくから樹と一緒に

にどこかで食べてらっしゃい」

「出前とつてもいいしな」

コーヒを飲みきってしまった父が、立ち上がり際に口を挟んだ。出前となると多分ピザになるんだらうなと、樹のジャンクフード好きを思う。

外に何か買いに出たとしても、ハンバーガーとか、ポテトとか、お菓子。

「……ちゃんとしたレストランになさいね」

同じことを思ったのか、母は念を押すように繰り返した。

腕時計の時間を確認しながら、ゆったりと学校までの道のりを歩く。

咲の通う高校は中高一貫校で、咲の自宅から歩いていける距離にある。

自転車の方が早く着くが、時間に余裕があるため咲は徒歩を選んでいた。といっても自転車が少し苦手な咲は、どちらにしろそれ一択だった。

時折ジョギングをしている男性が追い越して行くのを見送ったり、向こうから歩いてきた女性が散歩している犬を眺めながら黙々と歩いていると、背後から軽い足音が聞こえてきた。

「咲ちゃん！ おはよー！」

眠気を感じさせない声に、咲は笑みを浮かべながら振り返る。

咲と同じ制服を着た、活発そうな少女が立っていた。

「おはよう、レイカちゃん」

挨拶を返し、歩き出す。並ぶとレイカの方が身長が低い。

横を歩くレイカは、少し前に咲の通う高校のクラスに時期外れに転入してきた少女だ。

とうに入学式もクラスの交流会も済んだところでの転入生で、クラスメイトたちは少し興奮気味だったのを覚えている。

綾野^{あやの}レイカ、と名前が書かれた黒板の前に緊張した様子で立つ姿を見て、なんとなくこじんまりとした可愛い子だな、と思ったのが第一印象だった。

自己紹介する様子をじつと見つめていると、そわそわと目線をうつつかせていたレイカと目が合う。

担任の先生の話聞きながらそのまま見つめあい、レイカが首をわずかに傾げたところで、ふと咲は笑いかけた。

友達になれそう。咲の直感がそう告げていた。

そしてその直感が外れることはなく、こうして二人で登校しているわけだ。

昨日出た宿題のことや、最近見ているドラマ、駅前にできたケーキ屋さんの話をしていっているうちに、校舎が見えてきた。

「あ、そうだ、咲ちゃん」

「なに？」

今思い出したとばかりに、レイカが両手を打ち鳴らして立ち止まる。必然的に咲も歩みを止めた。

「昨日帰るときにぶつかって来た先輩がいたじゃない？」

「うん」

一瞬考えて頷く。レイカや他の友達と下校するとき、昇降口でレイカにぶつかった生徒のことだろう。

髪を金に近い茶髪に染めていて、少し怖そうな雰囲気があった。

謝るレイカに対する姿を見た限りでは、友好的な感じでもなかった。更に言えば少し睨んでいたと思う。

レイカの言葉では先輩らしいが、咲はその生徒を見たことがなかった。

他の学年とは校内全体の行事でしか関わらないからだろうか。それにしてもレイカはいつのまにその生徒の情報を知ったのだろう。

「その先輩がどうしたの？」

レイカを促しつつ、再び歩き始める。ついでに腕時計の時間を確認した。

十分朝礼開始までに余裕がある。

「えっとね、咲ちゃんの相性度はどうかかって」

耳に入ってきた質問の内容に、思考が鈍足になった気がした。相性度？

「……相性度？」

何の？ 何が？ 先輩の印象ではなく？ と疑問符を振りまいていると、レイカも一緒に首を傾げた。

「あれ？ 質問の仕方が違ったのかな……」

小さく呟く内容もいまいちよく分からないが、とりあえず例の先輩とレイカとの相性のことを聞いているのだろうか。

そうだとすると、レイカは考えるまでもなく、例の先輩に気が有るということになる。

明るく活発で真面目なレイカと、不良っぽくて無愛想な感じの先輩。

咲は少し困ったような表情を浮かべ、人差し指を下唇に当てる。

答えにくいことを答えるときにする癖だった。

「あの、あくまで私の主観だけど」

「うんうん」

レイカは咲の言葉にぱつと顔を輝かせて聞き入る。それに少し後退りながら続けた。

「レイカちゃんには珍しいタイプ……かな」

はつきりいってしまえば合わない。

「えー、珍しいタイプ？」

それってどういうこと？ と更に質問されたが、これ以上はなんとも言い難く、咲はなんとかごまかしながら校舎の中へと入っていた。

なんで突然私にあんな質問したんだろうと疑問に残ったが、気にしないことにする。

「珍しいタイプ、珍しいタイプ……普通ではあまり行かないところで遭遇する？ 倉庫裏……？ ふーん」

レイカが青いノートを読みながら呟いた言葉は、咲には聞こえなかった。

上履きに履き替え、咲がレイカと並んで教室までの廊下をあるいていると、後ろから背中を叩かれた。

傍から聞けば小気味良いだろっ音をたて、いやでも数歩前へたたらを踏むことになる。きつと平手だったのだろう、背中が軽くじんじんする。

同じく叩かれ、前に思い切りつんのめったレイカが勢い良く振り返ると、後ろに立っていた相手を睨み付けた。どうやら咲よりも強く平手を食らったらしい。

「い……ったいじゃない、さくらいたける櫻井武！」

「のろのろ歩いてんなよ」
にやりと悪戯な笑顔の武が平手をした両手をズボンのポケットにしまう。

咲とレイカのクラスメイトであり、女子の間ではあまり評判が宜しくない。

先ほどの行為の通り、ちょっかいが過ぎるのだ。それでも嫌われ者ではなく、持ち前の明るさから一応クラスのムードメーカーでもある。

「絶対手のあと付いた！」

「咲ならともかく、お前のかてー背中にあとなんか付くかよ。こっちの手が折れるかと思っただっての」

「なんですってえー！」

からかうような言い草に、レイカは顔を赤くして怒る。

振り上げた腕を避けて片手で受け止めると、櫻井はもう片方の手でレイカの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

セミロングの髪型が一気に爆発したように乱れる。

それに更に憤慨したレイカは、逃げる櫻井を追いかけて走っていった。

その間、咲が口を挟む隙はなく、二人に置いて行かれた形で教室に向かうこととなった。

最近では恒例になっている二人の朝喧嘩は、一年生の新名物だと噂されている。

もちろんレイカの耳には入っていない。知ったら知ったで大騒ぎになることは間違いないだろう。

賑やかになり始めた校内を歩く。

一年生の教室は三階にあり、二年、三年と学年があがるにつれて下に下りていく。

咲はお世辞にも体力があるとはいえない。

朝礼時間のギリギリになって駆け上がっていく生徒たちのような真似はできるはずもなく、時間に余裕を持ってゆっくりとしたペースで階段を上がって行く。

二階から三階へと続く階段の踊り場で、咲は軽く肩を叩かれた。

いつのまにか男子生徒が横を歩いていった。

「よっ、早いな」

「おはよう、月野君。いつも通りだよ」

月野は咲のクラスメイトで、席が隣同士でもある。男子生徒の中では一番喋る相手だ。

スクールバッグとは別に、少し大きめのエナメルのバッグを肩から提げている。

校庭の水道で顔を洗ったのか、月野の前髪は少し濡れて跳ねていた。

「サッカー部の朝練習だったの？」

「おー。パス練だけだけどな」

サッカーは小学校から続けているらしく、月野はサッカーの強豪校でもあるこの高校にスポーツ推薦で入学している。

まだ入部して間もないにも関わらず、早くも先輩や同級の女子生徒からの視線を集めていた。

「そっぴや、今日の体育つて体力測定の練習だったよな」

「あ、そうだね……」

体育、体力測定、と嫌な単語が耳に入り、少し気分が重くなる。

大人しい外見に見合った運動神経の咲には、体力を測定しなくともその結果は分かりきっていた。

咲は小学生の頃から、学業において平均より高い成績を修めてきてはいるが、体育だけは別だった。

五段階でいうと、いわゆる“アヒルさん”のような数字だ。ペーパーテストの点数が良ければ、アヒルさんは空へ飛び立ちただの“さん”になる。

思い出したくない思い出をめぐらせ、明らかに気分を落ち込ませた咲を見て、月野は少々慌てたように頭を掻いた。

「あー……あんまり気負いすぎんなよ。余計に悪くなるから」

「……うん、頑張る」

暗い雰囲気のまま教室に到着し、月野が先に教室内へ入っていく。咲の頭をぼんと撫でていくのも忘れない。

「体育ン時時間あったらアドバイスするからさ、落ち込むなよな」

「ありがとう」

小さく柔らかな衝撃に頭を押さえながら、咲も後に続く。

今日一番と思える気分の低気圧は、爽やかな風に吹き飛ばされていったようだった。

体育の授業終了後、咲は保健室へ向かっていた。五十メートル走

で、走っている最中にレイカが転んで怪我をし、保健室へ行つたまま帰って来なかったためだ。

ゴール横でタイムを計っていた咲が場を離れるわけにもいかず、心配しつつも保健室へ向かうレイカを見送ったのだった。

膝と手のひらを擦りむいていたようで、想像するだけで痛くなる。咲は両手を擦り合わせながら廊下を急いだ。

今の時間は丁度お昼休みで、生徒の行き交いが激しい。

購買や食堂へ急ぐ生徒の波に逆らって行けば、ようやく保健室の手前まで着いた。

ふいに、保健室から男子生徒が出てきた。口の端に絆創膏が貼つてある。

一瞬だけ咲と顔を会わせた男子生徒は、そのまま咲に背を向けて歩いていった。

見覚えがある、首を傾げたところで思い出した。今朝レイカが言っていた先輩。その人だった。

例の先輩が廊下の角を曲がるのを見送って、咲は戸が開いたままの保健室を覗いてみた。

視線をめぐらせると、薬品棚に向かって立つレイカを見つける。

「レイカちゃん、大丈夫？」

「あつ、咲ちゃん！ うん、もう大丈夫だよ。水で洗ったら大したことなかったし」

「よかったあ」

両手を振って元気なアピールをするレイカに、咲はほつつと息を吐いた。

処置台の上にある脱脂綿や消毒液を片すのを手伝い、保健室を出たところでレイカが立ち止まる。

「ねえねえ、さつき朝に私が言ってた先輩が保健室から出てくの見なかった？」

唐突な質問に一瞬考えたが、すぐに数分前の出来事を思い出す。「うん。レイカちゃんあの先輩と一緒にだったの？ 何かあった？」

あの怖そうな雰囲気、口の端に怪我とあっては、保健室に来る前に何があったのかは想像するに容易い。

もしやレイカが巻き込まれたのではと心配が蘇ってきた。

「ううん、特に何かされたとかじゃないんだ。ちよつと愛上昇度が知りたくって」

え？ と声には出さなかったが、口はまさにそれをかたどっていた。

愛、上昇度？

「咲ちゃんの、あの先輩と私ってどう？」

「えつと……私的に？」

「うん」

この質問は、今朝の質問と関連しているのだろうか。

例の先輩とレイカの愛が上昇している度合いを、何故咲が分かるというのか、さっぱりと分からない。

友達同士の恋愛相談とは、こういうものだっただろうか。

私あの子が好きなんだよね、あの子のことどう思う？ とは聞かれたことがあるかもしれない。

しかし、愛が上昇しているかどうかという相談は初めてだった。

ちよつとしたジョークも混じっているかもしれない。例の先輩とレイカがお似合いかどうかを考えれば良いだけなのか。

咲は深く考えるのをやめた。

「……名前も知らないし、性格もよく分からないから、何となくでしか言えないんだけど」

「あ、そうだよ。でも何となくでもいいよ」

「うーん、すごく頑張れば、仲良くなれるかも、ね……？」

語尾が疑問系で終わってしまうことを許してほしい。咲は困ったように眉尻を下げた。

「すごく頑張れば？ しかも、まだ“かも”なんだあ」

「“まだ”？ っていうか、まずは名前を知らない」と

「そっか、そうだよー！」

がっかりした様子のレイカを、疑問を抱きつつも咲は励ますように助言する。

今の所、咲にはレイカが例の先輩のどこに惹かれているのか分からないため、印象は良くないままだ。

友達を心配する身としては、できれば関わり合いにならない方が良いのではと思うほど。

けれどもレイカの気持ちを傷つけたくはない。

「お昼食へに行こう」

「うん！ すっごいお腹すいたー！」

のんびりしていたら、昼食を食べそびれてしまう。

咲が促すと、レイカは思い出したかのようにお腹をさすり、歩き出した。

咲とレイカの横を、男子生徒たちが走って追い抜いていく。

校庭で食後の運動でもするのだろう。それに気を取られて、咲はレイカが歩みを止めたことに気付かない。

「まだ十パーセントかぁ……名前イベント済んだらもっと上昇するかな」

やはりレイカが呟いた言葉も、咲が気付くことはなかった。

蘇芳 咲（後書き）

ゲーム名：***** ジャンル：女性向け学園恋愛シミュレーション

キャラクター攻略ノート

蘇芳 咲（すおう さき）

***学園の生徒。（ヒロイン名）の友達。

早い段階で仲良くなれる、初心者向けキャラクター。

選択肢はすべて好意的なものを選んでいけば、友情エンド（ノーマル）が達成可能。

二週目以降は他キャラ攻略の助言や手助けをしてくれる。

更に攻略後にご褒美アイテムとしてキャラクターの攻略情報を記録できるノートが手に入る。

物語をスムーズに進めたい場合は一番最初にこのキャラクターを攻略しよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0075ba/>

たぶん乙女ゲームの脇役的ポジション

2011年12月31日02時47分発行